

愛媛労災特別介護施設

岡幸代 井上明子

### 【はじめに】

医療依存度の高い重度被災労働者の施設で、特別な介護に加え私病の悪化が増えている。そのような中で看取りを経験し、急な展開でうまく職員同士で協働することができなかつた。今後死を迎える高齢者が増加することを考えた時、看取りケアへの関心を高めていく為の学習が必要と考えた。個々の持つ看取り・死のイメージをブレインストーミングとアンケート調査で明らかにし、そのイメージをポイントにした看取りの講義を実施した結果、前向きな姿勢が見られた。また多職種で看取りケアを考える機会となり、組織的な取り組みの一步となったので報告する。

### 【研究目的】

看取りについての意識調査を基に学習ポイントを明らかにした講義を受けることで、看取り、死について考えることができ前向きな姿勢を育てる。

### 【研究方法】

1. 研究期間 平成29年1月～5月
2. 研究対象 当施設の介護職員22名 看護職員11名
3. 研究方法
  - 1) 講義前のブレインストーミングによる全体の意識調査,
  - 2) 講義前のアンケートによる個別の意識調査,
  - 3) ブレインストーミングとアンケートの結果を反映した講義内容を依頼し1回目講義を実施,
  - 4) 1回目の講義後のアンケートによる個別の意識調査,
  - 5) 講義後のアンケートの結果を反映した講義内容を依頼し2回目講義を実施,
  - 6) 2回目の講義後のブレインストーミングによる全体の意識調査

### 【結果】

「看取り」に対するイメージは延命するのではなく時間と共にその人に寄り沿う・今自分が出来る事を一つ一つすればいい等前向きな意見がみられた。その一方では、自分の家族の看取りでも精神的にかなり辛かった・介護拒否をされると難しい等の消極的な意見もあり、分かれた。

### 【考察】

看取りは特別なことではなく、日常生活の延長線上に死があり、ゆっくり時間と共に見守っていくことで良いということに気付くことができた。不安はあるが、職員同士で協力して前向きに取り組んでいくきっかけになった。入居者・職員のニーズに合った看取り教育や環境の整備をすることが今後の課題である。